

# イスラエル 考古学研究会

ニュースレター

No. 2

2006年6月

しては、周知のとおり、日本とイスラエル側の研究者による多年の共同研究を通じた努力と密接な交流が実り、関係各方面の理解が得られた結果として実現したものである。数々の経緯を経て、ついにテルに発掘の鍬が入った光景を目の前にして、参加した一同、大きな感動を禁じ得なかった。

発掘調査は3月16日から3月29日にかけて行われ、下記のメンバーが参加した。置田雅昭(団長・天理大学)、月本昭男(副団長・立教大学)、桑原久男(天理大学)、山内紀嗣、日野宏、巽善信、飯降美子(以上、天理参考館)、杉本智俊(慶応大学)、長谷川修一(テル・アヴィブ大学)、千巖ふみ(同志社大学)、小林由弥(奈良教育大学)、中野晴生(写真家)、月本恵(青山学院大学・ボランティア)。現地スタッフはイツイク・パズ(バイト・ベール単科大学)、ニル・オルタル(ヘブライ大学)であった。

現地では、その間、宿舎、食事など、キブツ・エン・ドールから全面的な支援を受けることができ、作業員は近くの村ケファル・ミスの青年たち10名であった。発掘調査に際しては、イスラエル考古局、国立公園局の視察、現地指導があり、現地調査と出土資料に関して、モシェ・コハヴィ名誉教授(テル・

## テル・レヘシュ発掘、始まる

桑原久男

2006年3月、下ガリラヤのテル・レヘシュで日本隊による発掘調査が始まった。この発掘調査に関



(撮影：中野晴生)

アヴィヴ大学)、エステル・ヤディン氏(テル・アヴィヴ大学)から貴重な教示を得た。また、調査期間中に、在イスラエル日本大使・横田淳氏の視察があった。

調査区はテルの南斜面、頂部から裾部にかけての各テラスに5×5mのグリッドを3カ所設定したほか、テルの最下部近くにウォール状の石組みが露出している部分が見つかり、そこにも追加で調査区を設定した。調査成果を全体としてまとめると次のようになる。

1. テルの最頂部には、ローマ期の居住域があり、出土した石製容器の特徴から、ユダヤ人のコミュニティであった可能性が考えられる。
2. テルの2段目テラスでは、ローマ期の居住が見られず、鉄器時代が最も新しいが、その直下に前期青銅器時代の層があることから、もともとの自然地形の高まりを利用してテルが形成されたと見られる。
3. 以前のサーベイ等では中期青銅器時代の土器が多く採集されているが、今回は中期青銅器時代の確実な出土遺物・遺構が見られなかった。これを追跡することは今後の課題である。
4. テルの最下部においては、後期青銅器時代から鉄器時代の遺構が岩盤の直上にあり、当初の想定とは異なって、前期青銅器時代の遺物が見られなかった。
5. 鉄器時代はテルの頂部に集中するのではという当初の想定とは異なり、鉄器時代の遺構がテルの頂部から最下部にまで広がり、広範な面積を



在イスラエル日本大使・横田淳氏現地訪問

(右から3人目。撮影：中野晴生)

占めていたことが明らかになった。

夏に予定されている第2次調査において、調査区を広げ、テルの形成過程について更なる追求をおこなう予定である。

(天理大学)

## 「青銅器時代のガリラヤ地方」

イツハク・パズ

前3000年紀から前2000年紀にかけての下ガリラヤ地方について、特にテル・レヘシュのある東部を中心に話をします。青銅器時代における下ガリラヤ地方での特徴のひとつに都市化ということがあげられる。大きな遺跡の周りに小さな遺跡が発見されていて、それを物語っている。重要なことは、この地域のほとんどの遺跡が実はまだ発掘されていないということである。発掘されているのはテル・ガル・ヘフェルとテル・キシオンだけである。

初期青銅器時代の下ガリラヤ地方東側で、主要な遺跡というのは2つある。ひとつはミトハム・シャハル、もうひとつがテル・レヘシュであり、この2つの遺跡はともにまだ発掘されていない。テル・レヘシュはタボル川の近くにある。テル・レヘシュが重要なのは、青銅器時代を通して居住がなされていたという点にある。テル・レヘシュはその外周から判断してテルとしては大きい方で、特に初期青銅器時代が一番大きかったと考えられる。

下ガリラヤ地方で出土した遺物は、出版の形ではほとんど公表されていないのだが、テル・レヘシュで発見された遺物はエン・ドールの博物館に所蔵されており、非常に参考になる。その所蔵されている土器から判断して、テル・レヘシュは中期青銅器時代にも居住されていたと思われる。中期青銅器時代において居住されていたと確認できる遺跡は非常に少ないので、興味深い。

後期青銅器時代にはガリラヤ地方の町はほとんどがエジプトによって支配されていた。ほんの一握りの町だけがエジプトからの独立を保持していた。下ガリラヤ地方で中心的な役割を果たしていたと考えられるのはテル・レヘシュとテル・キシオンだけである。ツヴィ・ガルはテル・キシオンをテル・レヘシュの前哨地と捉えている。というのも、テル・レヘシュが主要道沿いにないのに対し、テル・キシオ

ンはまさに主要道沿いに位置しているからである。エン・ドールの博物館に所蔵されているテル・レヘシュ出土遺物には後期青銅器時代の土器もあるが、その中には輸入されたものがある。たとえば、キプロスからもたらされた通称「ミルクボウル」土器や、ギリシア(ミケーネ産かもしれない)からもたらされた土器がある。多くの研究者がテル・レヘシュは主要道の近くにないことから、輸入品はないだろうと考えていたが、実際には見つかったのである。主要道にはないテル・レヘシュに輸入された土器があるということもまた、テル・キシオンとの関連の緊密さを窺わせるものである。

文書にもテル・レヘシュやガリラヤ地方のことが記録されている。エジプトはこの地域に大きな遠征を何度か行っているが、テル・レヘシュと関連するのはアメンホテプ2世によるものである。アメンホテプ2世はイスラエル北部に向けて、北へのルート確保のために遠征している。テル・レヘシュはアナハラトと同定されるが、アメンホテプ2世の年代記によれば、アナハラトはおそらく5ヶ月間の戦いのあとで落城している。次にガリラヤ地方が言及されるのは、アメンホテプ4世の治世、いわゆるアマルナ時代である。この時代を特徴づけるのは、カナンにおける属国の王たちの激しい戦いである。アマルナ文書に出てくるガリラヤの都市はアッコ、スラム、テル・ハナトンである。テル・レヘシュはアマルナ文書には言及されていないが、おそらく支配的な立場にあっただろう。アマルナ文書によると、スラムはシケムの王ラブアユによって破壊された。ラブアユによるガリラヤ地方の侵入はエジプト属国間の連合軍を形成させることになる。ラブアユはメギドの王に捕縛されてエジプトに送られるが、アッコ平野に向かう途中のテル・ハナトン近くの道で、身代金を支払うことで解放される。アマルナ文書には

テル・ハナトン付近で襲撃されたバビロニアの隊商についても書かれているが、そこから受けるガリラヤ地方の印象は、反逆者などが逃げ込む無法地帯であり、反エジプト的な要素も持っているということである。もうひとつ重要なこの地域への遠征は第19王朝セティ1世の時になされた。ベトシャンで見つかった有名なセティ1世の碑文がこの遠征について記している。セティ1世の遠征がガリラヤ地方を通って行われたということは示唆的である。

テル・レヘシュの重要さを一言で言うならば、青

銅器時代のすべてにわたって居住が続いていたと考えられる点である。テル・レヘシュの歴史を良く理解できる場所というのは、テルの南側の斜面であろう。我々が期待しているのは、この遺跡がエジプトの文書で言及されているような非常に重要な遺跡であるということが証明されることである。我々のプロジェクトは下ガリラヤにとって非常に重要なものとなるであろう。

(イスラエル、ペイト・ベール単科大学)



上空から見たテル・レヘシュ (撮影：中野晴生)

## 「ペルシャ～ヘレニズム時代の キンネレト湖の水運に関する一考察」

牧野 久実

本研究の目的は聖書やエン・ゲヴ遺跡の発掘で得られた情報、キンネレト湖（ガリラヤ湖）地域の風や波といった自然条件を再検討し、加えて、古くから湖上の水運が発達していた琵琶湖の研究成果を参

考にしつつ、ペルシャ～ヘレニズム時代を中心にしたキンネレト経由の交易の実態について明らかにするためのヒントを探る点にある。

ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代（紀元前5

世紀～紀元前3世紀頃)の南レヴァントには遺跡が少ない。しかし、キンネレト湖地域と地中海沿岸部には遺跡が集中する。遺物や遺構の分析によると、これらの地域の繁栄はフェニキア人の交易活動と関連する。しかし、遺物や遺構の分析によると、フェニキアの関わり方が異なることがわかる。地中海沿岸地域は華やかな交易品や大掛かりな建造物が出土するのに対し、エン・ゲヴやアナファといったキンネレト湖地域の遺跡では交易品がそれほど多くなく、むしろフェニキアの日用品が出土していることから、これら2つの地域におけるフェニキアの交易活動のあり方は異なっていたと考えられる。しかし、こうした背景の一方で、フェニキアの水運については海路(地中海)についての研究が主流であり、キンネレト湖における活動についてはよくわかっていない。

聖書の記述は若干時代が遡るものの、フェニキアによるキンネレト経由の水運について示している。「彼らはセニルの杜松をもって、お前の舷板すべてを造り、レバノンから香柏を取って、お前の上に帆柱を造った。彼らはバシヤンの樅をもって、お前の櫂を造り、キッティ人の島々の糸杉をもって、お前の甲板を造った。エジプトの上亜麻の文錦がお前の帆、おまえの旗印となった。エリシャの島々の青紫と赤紫がお前の覆いとなった。シドンとアルワドの住民はおまえの漕ぎ手となった。お前の賢者たちが、ツロよ、お前の中におり、彼らがお前の水夫となった。ゲバルの長老と賢者らがお前の中におり、お前の亀裂を修繕する者と[なった]。大海を渡るあらゆる船と船乗りたちがお前の中におり、お前と交易を行なった。」(エゼキエル書27章5～9節 月本昭男訳1999年 岩波書店)。ここからはフェニキアがキンネレト湖東部地域も船材の産地として認識しており、フェニキアに船舶の修理や制御に優れた技術者が居たことがわかる。また、「どうか、私のためにレバノン山から杉の木を伐り出すよう、[あなたの家来に] お命じください。私の家来たちもあなたの家来たちと一緒に働かせます。私は、あなたの家来たちの賃金を、あなたのおっしゃる通り

にあなたに払います。ご存知のように、われわれのもとには、シドン人のように[巧みに]木を伐る術を知る者がいないのです」といわれている(列王記上5章20節 池田裕訳1999年 岩波書店)。ここからはフェニキアに木材の切り出しや運び出しの技術を持った専門集団が居たことがわかる。「ソロモンは、ヤハウエの神殿と王の宮殿の二つの建物を二十年かけて建て終えたとき、……[その間] ツロの王ヒラムは杉と糸杉の材木と金を彼の望むままに[供給して] 助けてくれた。……ソロモン王は、ヒラムにガリラヤの地の二十の町を与えた。ヒラムはツロから出て来て、ソロモンが彼に与えた町々を見たが、彼にはそれらが気に入らなかった」(列王記上9章10～12節)からは、クレンゲルも指摘したように、フェニキアの都市ツロがキンネレト地域を後背地としていたことがわかる。さらに、「そして、ヒラムはソロモンのもとに人をやって言わせた。「あなたの申し出を伺いました。杉の木材と糸杉の木材は、お望み通りにいたしましょう。私の家来たちは[それを]レバノン山から海まで運び降ろします。私はそれをいかだに組んで、海路、あなたが私に指示する場所へ送り、そこでいかだを解きます。それからあなたの方で運んで下さい。あなたには、私の家のために食物を渡して下さるよう願います」(列王記上5章22～23節)からはフェニキアはレバノンの木材を筏に組んで、エルサレムまで海路で運んだことがわかる。

以上の点をまとめると、考古資料からはキンネレト湖周辺の遺跡ではフェニキアの日用品が目立って出土していることから、単なる交易ではなく、生活、滞在しながらの交易活動であった可能性が考えられる。また、聖書の記述からはフェニキアには造船や航海に係る専門集団が存在しており、船材をキンネレト湖地域からも得ていたことがわかる。また「海路」を通じてレバノンの木材を筏に組んで方々へ運んでいたとあり、歴代誌下2章15節ではヤッフォまで、すなわち地中海経由で運んだことがわかるが、キンネレト湖は通常「海(ヤム)」と呼ばれるため、「海路」としてキンネレト湖経由も利用されたという可

能性が考えられないだろうか。また、木材の伐採や運搬という点から、水位や帆船に都合の良い風向といった季節性を考慮した輸送を行っていた可能性が考えられないだろうか。

こうした可能性は古くから日本の東西南北や大陸を都と結ぶ大動脈であった琵琶湖の水運に関する研究の成果を参考にできる。琵琶湖では古代より都の建築に琵琶湖周辺の山々の木材が使われ、木材の運搬には季節による河川の水位の上昇等を考慮しながら、周辺の山々と関連する水系と湖がルートとして利用された。また、それぞれの過程で專業集団が作業に携わっていた。また、湖上そのものにおいては日本各地からの大量の物資が琵琶湖経由で都へ運ばれ、そのための帆船の制御には季節や時間帯によって異なる風や水流を読むことが重要であり、そうした知識が船頭や漁師の間で代々受け継がれていた。

これらの琵琶湖における水運から類推すると、聖書に記されたフェニキアによる木材の筏流しは河川も含めて水位が最高位になる春頃に行なわれただろう。レバノンの山地からエルサレムへ木材を運ぶ場合、レバノン山地とアンチ・レバノン山地の間の地溝帯（ベカ谷、リタニ川等を通じてヨルダン川へ）からキンネレット湖、さらに南へという川筋や湖を利用したルートが地中海よりも便利だった可能性も考えられる。また、湖上の輸送そのものを考えると、帆船の利用に大きな影響を与える風速や風向についても考慮しなければならない。キンネレット湖の風については、西オーストラリア大学の工学数学科（A school in the faculty of engineering, computing and mathematics, The university of Western Australia）の水環境研究センター（Centre for Water Research）が数年間にわたる10分ごとの計測データをネット公開している。それによると、夏季には風の速度と方向にある程度の規則性が見られる。毎日午後になると急に風力が増すが最大でも毎秒10mを越えることは無い。夜中になるにつれて風力は弱まり、明け方にはほぼ無風状態となる。風の方向は風力の最大時を中心に西風であることが多く、時に南風となる。すなわち、夏季は帆船を御

すに適当な風力と方向が読みやすいといえる。一方、冬季の風には規則性が見られない。風向きは夏季とは逆の東風が毎秒5m前後で吹く。そうした状況が1日のうちに少なくとも1度、多いときには4～5度も見られ、1月半ばまで続く。11月から1月半ばには、西風が吹いた直後に毎秒10m、時にこれを大きく上回る東風が吹きぬけるといった、風向きと風力の急激な変化が見られる東岸に海拔500mを越えるゴラン高原が迫り、ここから吹き降ろす東風が突風となっている。すなわち、冬季の航行は予測できないような困難に見舞われる危険性を孕んでいたといえる。

これらのデータは近年のものであるが、気象状況が古代においてもほぼ同様と想定すると、エンジンによってある程度の波や風を御すことのできる現在とは異なり、風速と風向きにある程度の規則性がある夏季が大掛かりな運搬船の航行に適していたであろう。また、小規模で日常的な漁や運搬などは年間を通じて行うこともできたであろうが、冬季の予測できない突風から船を守るための工夫、すなわち防波堤や港が必要であっただろう。キブツ・エン・ゲヴ在住の研究者メンデル・ヌンがキンネレット湖周辺で発見した港の遺構と設置面の高さを見ると、港の遺構の設置面は海拔マイナス約212mを境に大きく2つに分類されることがわかる。これらが時代差か、それとも船の規模による違いかは現在のところ明らかではないが、深い標高に設置された遺構が湖岸の東西南北にほぼ1箇所づつ分布していることやエン・ゲヴに標高の異なる2ヶ所の遺構が見られることを指摘しておきたい。

以上のように、キンネレット湖における主な水運が春から夏にかけて集中的に行なわれていた可能性がある。では、水運に不向きな冬季においては湖岸の集落は強風や荒波に対して何らかの策を講じていたのだろうか。東岸の集落エン・ゲヴはスシートにも通じる重要な交通の拠点である。しかし、すぐ東にゴラン高原が迫るうえ、湖底の形状は東側ほど深くなっている。こうしたことを考慮すると、エン・ゲヴの集落は西からの強風に見舞われた場合、先の

データが示すような階級7（強風）などの影響を直接受けた場合を想定した建築上の工夫をしていたのだろうか。

海岸部の護岸整備の例を参考にすると（厳島港長浜地区海岸、相馬港原釜地区海岸、宇治山田港二見ヶ浦海岸）、低水位と最高水位の範囲から護岸の高さを設定しており、それらを総合すると低水位+7.1m、最高水位+6.2mの幅に護岸が設定されていることがわかる。キンネレト湖のローマ時代の水位については、前出のメンデル・ヌンがクファール・ナウム湖岸の遊歩道、クルシの港の生簀といった遺構から推定している。現在のティベリアの遊歩道が高水位から60cmのところ設置されていることから類推したもので、それによるとローマ時代の水位は海拔マイナス210.85mから209.85mと割り出せる。階級7の風速では波高は約4mと算出されるため、エン・ゲヴの集落は海拔マイナス202.75mから199.65mの高さをもたせると、護岸の役割を果たすということになる。ペルシャ時代か

らヘレニズム時代のエン・ゲヴにおいては、いくつかの層位が観察されており、出土遺物からは特に海拔マイナス196.9mと196.5mの高さで遺跡全体における時代区分がなされることが理解されつつある（ただし、東側の2段のステップ以東の地区は低く設けられている）。すなわちペルシャ時代から初期ヘレニズム時代と後期ヘレニズム時代である。しかしながら、想定される護岸の標高はこれらの標高よりもおよそ3m低くなるので、ペルシャ時代～ヘレニズム時代における集落の再構築は波高とは無関係であることがわかる。むしろ、算出された波高は鉄器時代の城壁や集落を構築するにあたっての盛り土との関連が指摘される。

以上をまとめると以下のようになる。(1) 聖書の記述によれば、フェニキアは少なくとも木材供給など、キンネレト湖と水運のつながりをもっていたようだ。木材を筏に組み、地溝帯とキンネレト湖経由で南へ運んだならば、河川水量の多い春であったと考えられる。(2) エン・ゲヴやアナファアから



湖から見るキブツ・エン・ゲヴ（撮影：中野晴生）

は、フェニキアの日用品が相当数出土しており、フェニキアがキンネレト湖地域に一定期間滞在しながら交易活動を行っていた可能性がある。この地域の風力と風向を考えると、キンネレト湖における帆船の利用は春から夏に限定されていたと考えられる。(3) 冬季の波高は最大 4m とえられる(ただし、湖水流など、さらに詳細な計算が必要)。ここから集落の設置高として妥当な標高を割り出した場合、ペルシャ時代～ヘレニズム時代にいく度か床面が高くなったが、それらは波高とは無関係と考えられる。この件については、むしろ鉄器時代のエン・ゲヴ(盛り土、城壁等)と関連するかもしれない。以上の結果を踏まえたうえで今後の課題としては、(1) 出土土器から季節性を求める。(2) 冬季の波高について、環流や周辺の地形から詳細な数値を求める。(3) 船の構造と機能との関連を検討するといった点についてより検討したい。

(滋賀県立琵琶湖博物館)

#### 会員募集

イスラエル考古学研究会では広く会員を募っています。本会の趣旨にご賛同いただける方であれば、どなたでも参加できます。入会ご希望の方は事務局までご連絡ください。

### ●●● 目次 ●●●

テル・レヘシュ発掘、始まる	桑原久男	1
青銅器時代のガリラヤ地方	イツハク・パズ	3
ペルシャ～ヘレニズム時代の キンネレト湖の水運に関する一考察	牧野久実	4
お知らせ(2005年度会計報告)		8

## 2005 年度会計報告

(2005年4月1日～2006年3月31日)

### 1. 収支

#### [収入]

会員会費(※)	¥81,000
寄付金	¥3,000
第3回研究会参加費	¥2,500
小計	¥86,500

#### [支出]

通信費	¥13,640
消耗品費	¥594
第3回研究会開催費	¥9,289
小計	¥23,523

※数年度分をまとめて支払われた方の会費は一年度分に換算して計算しています。

### 2. 決算

収入	¥86,500
支出	¥23,523
残高	¥62,977

イスラエル考古学研究会 ニュースレター No. 2

2006年6月30日

編集: 巽善信 宮崎修二

発行: イスラエル考古学研究会

〒632-8510

奈良県天理市柁之内町 1050 番地

天理大学文学部 考古学・民俗学共同研究室内

e-mail: israelkai@yahoo.co.jp

郵便振替口座

00960-3-79256 イスラエル考古学研究会